
去った日常

羅針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

去った日常

【Nコード】

N8596Z

【作者名】

羅針

【あらすじ】

現実逃避を願っても、やっぱり日常が好きな青年と、日常を願っているのに、非現実には巻き込まれる少女のお話

出会い

「うっさみい」

今日はクリスマス。彼女と呼ばれるものを持ってない暦17年。

名前を古見在こみぞんという。古見 存。

基本、コミゾンと呼ばれている。

眼は黒、少し赤みがかかっている。髪は白。銀髪のほうがあっている表現だ。

銀髪はロングヘアで肩よりちょっと長いくらい。たまに女の子と間違えられるほどの容姿。

容姿端麗、頭脳明晰。女の子が放っておくわけではないのだが、モテない。

クリスマスに独りというのはとても寒い。ましてや、晩御飯を買いに行くとなると億劫になる。

そう、クリスマスツリーのまわりにはカップルどもがうじゃうじゃいやがるのだ。

(ひっそりとしているよ！)

心の底で大声を放ち、空を見る
空を雲が覆っていた。

(一雨きそうだな…… それまでにご飯買っておいこつ……)
ハロ ズまで走る。

「ん〜」

背伸びをした。ハ ーズの近くの公園でご飯を食べて、そのまま立ち上がり背伸び。

カツサンド3パック、ハム Mayo サンド6つ、200g程度の弁当30個。

「足りねえな……」

胃袋をどこに持って行ったのだろうか。

この世界には特殊な力を持った人物が、10人いる。

一人は、電撃

一人は、火炎

といった風に、要は超能力だ。PSIを使えるだけで、威張れるのだ。

コミゾンにはこれといったPSIは無い。

PSIは、

「99%の才能と1%の活力」があれば引き出すことが出来る人間に最初から備わった力だ。

コミゾンには才能があるが、人生に、完全に無気力だった。

何をするにも無気力・脱力。モテない最大の理由かもしれない。

「何かいいこと起きねえかな……」

夜空を見上げる。いやな予感がする。

ポツポツと雨が降り始めた。

(やっぱりかあ)

帰る、と言って地面を見たその時、

「危ない」

「は？」

上を見るとそこには一人の女の子が落ちてきた。

「うわわわわ」

お姫様抱っこで救出

「邪魔」

ヒョイツと腕から逃れると、その少女は空を見上げた

「一般人が紛れ込んでるじゃないか、殺す」

「は？」

キュルルルルと回転する矢がコミゾン目掛けて発射された。

キユイイイン！

その矢は兆弾され、打った男へ戻っていく

「邪魔をするな」

「一般人を巻き込むな」

バチバチと火花を散らす二人。男は未だに宙そらに浮いている。

サイキツカーか？

少女は手を前にやると「衝撃ブレイク」と言った。

次の瞬間、少女は空に舞い、男と対決していた。

コミゾンは腰が抜けて立てなかったが、何とか逃げた。

翌朝

起きた。朝になったので起きる。

「なんだっ たんだ昨日は？」

独り言をブツブツつぶやいている「ミミゾン」。

「……………うにゅ」

「……………」

(何も見てない聞いてない。)

地面では昨日であった少女が寝転んで熟睡していた。

「さ！朝御飯食って学校行こう！」

「……………私も」

「……………」

場が沈黙する。

「返事は？」

「……………」

「返事は？」

「いや……………その……………」

「返事は？って聞いてんの」

「はい。すみません」

「よろしい」

「……………」

「こいつ……………中1くらいか？」

「何歳？」

「19」

「……………嘘だろ？」

バツ！つと食べさせるために持たせていたフォークを俺の眼に突き立てる。

「馬鹿にしたな？」

「スミマセン！」

「よるしい」

「……」

「ふーん ふーん」

出していたサラダとパンと順調に食べ進める少女

「なんでここに来たの？」

年上だったとは……

「行くアテがないから」

「……」

(こんな爆弾娘、いらねー……)

「あ、ちゃんと今日出て行くからお構いなく」

「あっそ……」

いつのまにか冷蔵庫の前に行って片っ端から口に詰め込んでいる」
の少女。

「名前は？」

「Q p o 1号」

「……は？」

「あなたには関係ないわよ。固有名はミナトだからそう呼んでくれて構わない」

「あなたは？」

「古見 存」

「コミゾン？ 本名？それ」

「本名だよ」

「そっ」

「んじゃ、俺は学校行くぞ。お前、適当にどっかいけよ」

「は？ あなたは私とこれからデートよ」

「……は？」

12月25日 <AM>

「俺は学校行くぞ。そろそろマジで遅刻する！」

「やくだあ デートデートお」

「何で、俺に、そこまで、固執するんだ？」

「始めて一緒に寝た人だから（ポツッ）」

「誤解を招く発言は止める」

「いこーよ 25日にもなって学校なんておかしいよお」

「補修だ」

「頭いいのに？」

「テストはまとも……？ なんで知ってんの？」

「貴方のことなら何でも」

「俺の名前知らなかったよな」

「あの時はあのとときだよ」

キャラ変わってるよな？絶対。

「あゝ もう！ 補修行がなかったらマジで落第なんだよ！」

「いいじゃん。」

「よくねえよ！ お前も早く帰れよ！」

「いーやーだあ」

「年上の癖に駄々こねるな」

「デートしたいもん」

（なんだこいつ）

「わかった。帰ったら行ってやるから」

「本当！？」

「ああ。うん」

パアッと顔を輝かせ、笑顔で返答する。

ミナトは眼は黄色で釣り眼。

髪は澄んだ透明感がある水色（本当に透明なわけではない）の長めのショートヘア。

寝起きはボサボサだった……

性格はコロコロ変わるからよく分からん。

俺はできるだけ補修を長引かせようと決意して家を後にした

12月25日 <PM>

補習授業が終わり、学校を出て、腕時計を覗く。

「6:20分。」

流石にどこかへ行こうとは言い出さないだろう。

学校の門をくぐり、近くの信号まで来ると、コミゾンには眼を見張った。

「……ミナト？ ミナト!？」

信号の反対側でミナトが腹から血を出して倒れていた。周りの通行人（野次馬）がとやかく言っているが、人ごみを掻き分け、ミナトの元に辿り着いた。

「あれ……? コミゾン?」

「おまつ! 何してんだ?」

「心配……してくれてるの?」

「当たり前だろ!」

「えへへ……つと……」

普通に立ち上がると歩き出した。

「お前大丈夫なのか?」

「平気だよ。これくらいなら。」

銃で撃たれたような傷痕が5〜6カ所あるのに……無事?

んなやけあるかあ!

「おい! 病院に行かなくてもいいのか?」

「うーん……病院じゃ、傷、治らないし。」

もう今日は帰るね」

「……」

じゃっ っと行って走って帰ったミナト。なんだっただらう?」

12月25日 <PM>

家に着いたのが8:40。遅くなった……

なんだか家に帰りたくなくて遠回りしてきた。

絶対無事じゃないよな。あれ。

「あゝ 気になる」

誰にも届かない心配を放つてみる。

その時家のチャイムが鳴った。

「……」

なんだか出たくねえな……出なかったら物語進まないし、仕方ないか。

「はい」

「こんばんわ」

「……ミナト？」

どうせこんな展開かと思ってたけどな。

「私はミナトではない。」

「だって！見た目とか同じじゃん！」

「私はQp010号。固有名ナギサ」

「はあ……」

納得した振りをしておく。

「今日一日泊めてくれ」

「はいはい」

なにこいつら……口調が違うからいいけどさ。容姿同じじゃん！

「んで？今日帰るとか言ってたなかった？」

「それはミナト。」

「そういう問題だよ」

「私もあなたと話してみたかった」

「なんで昨日ミナトが泊まったのしってたの？」

「Qp0系統は研究所と思考がリンクしている。」

それはQ p p o全体で共有できる」

「そっか」

「で？何から話せばいい？」

「何から、というと？」

「お前は俺と話したくてここに来たんだろう？」

「分かりました。一つ相談したくて来ました。」

「内容は？」

「私たちQ p p oを守ってください。」

……私たち？

「何人いるの？」

あ……ノってしまった。

「全部で100体います。」

ある組織で作られ、世に放たれたのですが、

脳リンクが出来ることから2体以上捕まえて兵器として

使おうとする組織が後を立ちません。

なので、私たちがその組織から守ってください。」

「なんで俺なんだ？」

「あなたは世界で一番強い「力」を使いこなせるからです」

「……最弱の「テレキネシス」も使えないのに？」

「はい。」

「それじゃあ 使わせてみてくれよ」

「分かりました」

そう言つて俺の腕をつかんだ。

次の瞬間、視界が一転した

12月25日 <深夜>

「ここは？」

「研究所です」

PSI能力開発をしています。」

「ふーん」

至る所で機械が「ウィーン」と唸りをあげている。

「ここです」

「うわっ すごい」

相当な数のミナトやナギサがいた。

「全て固有名が在ります。覚えますか？」

「遠慮しておくよ」

「やあ こんにちは」

「あっ こんにちは」

研究所の博士みたいな人が握手を求めてきたので握手をした。
今ってこんばんわだよな？

「君が例のコミゾン君かい？」

「え？あ！はい」

「それじゃ、こっちに来てくれ」

「はい」

機会がいつそう多い部屋に来た。

「これをつけてくれ」

「なんですか、これ？」

「脳波を一定間隔で狂わす機械だ」

君にはセンスはあるのに気力がないと聞いた。
今は役目が出る。それを強く思い浮かべて」

護衛は決定なんだ……

「了解です」

あいつ等を守る……あいつ等を守る……あいつ等を

「グウ」

「よし」

俺は寝てしまったようだ

「ここは？」

「あ！おきたあ 今日補修ないんだよね？」

「うん。」

「私はミナトだよ！」

こいつ、初めて会った朝は性格怖かったけど……キャラチェンジ？

「そうか」

「私が能力発動まで指南することになってるから」

「オツケー」

「それじゃ、まずはねえ……ご飯作って！」

「……は？」

そこにはキッチンと冷蔵庫がある。

「私、ご飯作れなくて……」

「はいはい」

俺も腹減ったしな。

「私も食べる」

「あ！ ナギサはだめ！」

「いいよいいよ」

「えーっ」

「ありがとう」

っていうかナギサ影薄いなあ 気付かなかった。

（1時間後）

炊飯器がなかったからナベでご飯を炊いている。

神経がいる作業だ

「2時間後」

これで7回目の失敗だ

「3時間後」

米なくなってきたな

「4時間後」

もう何回目だろう

「お腹減ったよう」

「同じく」

「俺もだ」

「なんで炊けないの!?!」

「んじゃお前がしろよ!?!」

「……」

「今日はおかずだけにしようか……」

「うん……」

「分かりました」

年上ロリコン顔に囲まれてご飯を食べた。
これから、どんなことをするんだろう?

12月26日 <AM>

「無理無理、吐く！」

「逃げるなあ 特訓だああ」

フツ！つと目の前にナギサが現れる

ガシツ！つと腰を掴まれ身動きが取れなくなる

「しまった！」

「ナイスナギサ！ <炎よ>^{バイル}」

「ちよ！ ま！ああああああ」

ゴアア つと炎に包まれて焼け死ぬ感覚を感じた。皮膚あちい！

「殺すきか！？」

「<引力>^{アトラクション}覚える気あるの？」

「それを言うなら<反発力>^{レプリシオン}よ」

「どつちでもいいのよ！ さあ 使いなさい」

「んな無茶な！」

「あんたなら出きる！さあ！ <炎よ>^{バイル}」

「くそ！ <反発力>^{レプリシオン}！ ぐあああああああ」

失敗。そろそろ死ねるんじゃないかな？

「こんの役立たず！」

「うっせえ なんのヒントも貰ってねえぞ！」

「それなら、先ず、炎を追い払うイメージと、Q P P oを守るといっ
感覚を持つて」

「え？ ああ頑張る」

「ナギサあ 面白くないじゃん」

「今のままでは効率が悪い」

「知らないよそんなの」

Sめ

「さ！ <炎よ>^{バイル}」

イメージ……イメージ……イメージ……きた！

「<反発力>!!」
レフリション

炎が方向を変え、ミナトに向かう、それをミナトはパイロキネシスを止めて回避

「やっと出来たわね」

「グア!? グアア」

脳が焼ける……

「ぐあああああああ!」

焼けるような痛み……なんだこれ……

「能力の反動ね。 博士呼んできて」

「了解」

フツ つとナギサが消え、次の瞬間、博士を連れてその場に現れた。

「やはりこうなったか。 <治癒>」
ヘアリング

ポアアアっという感覚が頭を撫でる。

徐々に頭の熱が冷えていく感じで痛みは去った。

「なんども力を使えば慣れると思うから、頑張ってみて」

「あ……はい」

12月26日 <PM>

以前に「特殊な能力者は10名いる」と言ったが厳密には間違いである

地球の人口を約6億人と考えて1/4、実に2億人の能力者が居る。日本には2300万人だっけか？

そして、能力レベルというのが存在する。

・レベル1 <物体移動・テレキネシス>

・レベル2 <炎・パイロキネシス><電気・エレキネシス><液体・アクアキネシス>

<遠距離会話・テレパシー>

・レベル3 <治癒・ヘアリング><衝撃・ブレイク><瞬間移動・テレポート>

・レベル4 <予知・プレゴニクシオン><千里眼・クレヤボアンス><精神読み取り・サイコメントリー>

・レベル5 <重力・グラヴィテーション>

・レベル6 <反発力・レプリシオン><引力・アトラクション>
その他

他にもいろいろあるのだが、大部分はこれだ。

そして、レベル5、6を使える人物が合わせて十名。

いろいろな重大機関に勤めているやつらがほとんどだがこの十名が世界のいろいろな基準を決めている。

- ・能力申請してない能力者が居た場合取り押さえ、罰則
- ・レベル4の一部とレベル5以上の者は年に一度必ず集会に集まる
- ・未成年が能力を使う場合、申請が必要である

他にも100も200もあるが、一部だけを提示して見た俺は17歳だから……申請は？

「大丈夫、出ているわよ」

「！？ ミナト？ ナギサ？」

容姿はQPOの女の子が立っていた。

「私はQPO35号、能力は^{サイコメンター}精神読み取り」

少し読ませてもらったわよ」

「……んで？ なんで出ているの？」

「博士が今日中には出来るだろうって、昨日から3日間の能力使用申請が出ているわよ」

「そりゃありがたいことで」

用意周到なんだな、この博士

「QPOっているんな能力使える人居るんだな」

今は休憩時間で研究所の外のベンチで缶コーヒーを飲命中。

あんまり美味しくないな……

「そうよ。<物体移動テレキネシス>からレベル4の大部分まで。

美味しくないなら頂くわよ」

ひょいっと缶コーヒーを取られ、飲まれた。

こいつ、大人びてるんだな。

ここで研究が19年行われてるって事かな？

なんでこいつ等は19歳なんだろう？

「信じてたの？ それ」

飲み終えた缶コーヒーを^{テレキネシス}物体移動>でゴミ箱まで運ぶ

……名前聞いてないな。

「ああ 少な。」

「1号から順に年齢は若くなっている。私は18歳」

それでも年上……

「100号は8歳よ」

「ふうん」

「なんで二つの能力使えるの？」

常人にはきついと思うんだが。

「常人じゃないからよ。」

私たちが生まれた理由は《サイ・プレイヤー複数能力者》の育成。

私たちの脳リンクを普通の人につないで100種類使える人体兵器を作るのがここの研究所の裏の顔。

博士はいい人なんだけど……利用されてるっぽいの」

「つてことは、お前の能力は別のQPOも使えるつて事？」

「いや、今はオープン開放モードではないから。」

「んじゃ、なんで使えるんだ？」

「常人じゃないからよ……レベル1は全員使える

テレキネシス＜物体移動＞つて最弱つて言われてるけど

本当は使い勝手のいい能力なのよ」

「ふうん」

こいつでもないのか……

「なにが？」

「いちいち全部読み取るなよ」

「癖で……ま、私の役目は終わったから早く入ってきなさいよ。」

博士、呼んでるわよ」

「……早く言えよ。」

俺は立ち上がった。結構寒くなかったな、ここ

12月26日 <PM>

「なんすか？ 博士」

「うむ。君の能力をPP(PSI Point)の制限なし使えるようにしたいと思う。」

この機械を頭につけてくれ」

「頭が痛くなったのは……」

「PP許容値を超えてしまったからだ。」

PPはPSIを使うことで自然に増えていくのだが

君は常人の数千倍って所か。」

どんだけだよ

「PPというのはサイポイントとか言っておるが本来は脳の容量を意味するんだ

PSIを使うことで脳は酷使されていく。

そして酷使の要領がオーバーしてしまうと、君みたいに頭が痛くなったり、

視界が悪くなったり。

やりすぎると死んでしまったり、体が動かなくなる」

「へー これからする、その機械は何を俺の脳に与えるんです？」

いやな予感がするんだよな

「脳に無理矢理能力をフル活用させる」

「は？」

スポ！つと頭に機械をはめさせられる

「大丈夫だ 治癒能力を使ってあげるから」

ウィーンと機械が鳴る。

脳に無理矢理干渉させられていく。

「ぐあああああああああああああああああ」

俺は気絶してしまった

「はあはあ」

私は現場へ急行してきた。

私の追ってはさつき潰した。長い戦いだっ

た Q p o 思考リンクでいろいろ入ってきたがこっちから向こうに流すのは N G だ。

現場は酷い有り様だった。

とんでもない重力で地球をへこませたような感じだ。

地球上で何箇所もこの原因不明の超巨大クレーターが出没している。誰の仕業だろう？

これは……レベル7の問題になってくるわね……

「はあはあ」

俺は手足を拘束されたまま脳が吹き飛ぶ感覚に耐えた。

気絶から意識を覚醒させると思考は難しいほどだった。

何を見ても感じないし首も動かない。

体感時間で5時間くらいしてなんとか動くようになったら

そこは酷い有り様だった。

研究所はぐしゃぐしゃになおり、俺が居るところ以外は陥没していた。

「博士！？ 博士！！」

「ここまで能力が強いとは思わなかったよ

ま、研究所は粉碎だが、Q p o は全員無事。

私も何とか生き残ったよ」

「俺……が暴走しちまったって事ですか？」

「この機械が強制的にそうなるようにしたんだ」

「そう……ですか」

「博士！大丈夫？

^{ヘアリンク}
<治癒>の Q p o 連れてきたけど……」

「大丈夫だ、ナギサ、メルー。」

ナギサはく瞬間移動テレポートで決まりかな

「そろそろこの拘束具、はずしてもらえませんか？」

このコミゾンは気付いていなかった。

コミゾンが地球に及ぼした大災害に……

12月27日 <AM>

「はあ……」

研究所は大破、Q p oも結構な被害を受けた。

博士は両足複雑骨折（3日で治るって言った）

俺は無傷。

罪悪感が半端無い。

「そろそろ実戦の練習でもしておくかい？」

「博士……なんでこんなに大急ぎでP S Iトレニングするんです？」

「……一刻も早くQ P Oを守って欲しいからね」

「なんで俺なんです？」

俺並みの能力なら他にも沢山いるでしょう」

「君だから、だよ」

答えになってないけど……

「君は出会ってしまった。Q p o 2号、アガサに」

「……まだ話をしたのはミナト、ナギサ、35号ですよ」

「君が一番最初にあったのはミナトかい？」

「え……それじゃあ24日にあったのはミナトじゃないんですか？」

「そうだ。あれがQ p oの裏切り者、アガサだ」

あいつ……そうか能力違うもんな。

大嘘つきやがって、行くアテがないとか言いやがって

「能力はレベル3でしたけど……？」

「レベルは関係ない。Q p oというのが肝なんだ」

「Q p oを操る……と？」

「そうだ 1号 100号で上位置換がある。1号が発信した命令は絶対だ。

2号から100号は従わなくてはならない。

だが1号が死んだら？」

2号が命令の司令塔となるわけだ。」

「だったら1号のミナトが帰って来いって命令すればいいじゃないですか」

「2号だけ、命令を無視しているんだ。その原因が分かれば苦労しないんだが……」

「それで、2号から1号他を守るために俺を強くしていると……」

「それだけではない。2号を助け出したいんだ。」

「どこから？」

「ある組織が2号を仲間としている。」

2号はいいように利用されているだけだ。

おそらく命令の無視はその組織のプログラムだろう」

「その組織からも2号を守れと……」

「そうだ。」

「その組織は？」

「その内強襲してくるだろうさ。教えたら君はかちわりに行きそうだからね」

「仕事は早く終わらせたいんで……だるいですね……」

「とりあえず、実戦練習だ。レベル4相手でいいかい？」

いきなりハードすぎませんか？

「いや……きついかと。」

「ま、レベル2といったところか」

「はい」

12月27日 <AM>

「んで？最初の相手はミナト？」

「悪い？」

「ま、始めましょうか」

「<炎バイルよ>」

俺は走ってかわす。

今回のルール

・俺は能力を<磁力マグネシオン>しか使ってはならない。

・一撃でも攻撃をあてたらミナトは勝ち

俺は三撃だ。

ハンデつきすぎだわ。

「<爆発ブローション>」

「<磁力マグネシオン>」

地面から砂鉄をひっぱって盾とする。

「やるじゃん」

「そつちこそ」

なんか……磁力で出来ることないかなあ

「<大火フレア・ブレイク>」

「え？ あ、やば！」

「これで勝ち！！」

「ちよ！ <大磁場（マグネ・フィールド）>」

ゴアアと磁力がここだけ狂う。

炎を動かすことは出来ないけど、さっき引つ張りだした砂鉄が凄い

勢いで舞う

大量の砂鉄で一種の竜巻を起こす。炎を弱める

「！」

「<砂鉄マグネット・ランス槍>」

24日に襲われたときをイメージする。回転がかかってたな

ギョルルルルと炎を突き破ってミナトの頬を掠める。

「これで一撃だ！」

「……そう。」

なんか……キレたかな？

「バトル戦闘モード」

「は？」

「やれやれ。ミナトは負けず嫌いだからなあ」

博士、冷静に説明しないで！

なんか怖い

「マイクロ・フレア＜小火＞マイクロ・フレア＜小火＞、、、」

全然ミクロじゃねえ。最初に放った炎並だ！？

「やばいつてこれ！？」マグネット・プレス＜磁力万力＞」

ミナトの周りに砂鉄を舞わせ一気に閉じ込める

これで二撃。

「エクスプロージョン＜大爆発＞」

一気に砂鉄が吹き飛ぶ。ぶちぎれじゃあーりませんか

「フレア・ブレイク＜大火＞」

さきほどの10倍程度の炎が俺を襲う。なんかいい案ないですか？

磁力……地球も磁力があるんだよな？

地球？惑星？

いろいろと考えをめぐらせる。

……これでいこう

「マグネット・ボール＜砂鉄球＞」

真っ黒で不気味な玉がそこに出現する

「！……！」

炎が俺を襲う

「マグネ・フィールド＜大磁場＞」

球を操り炎の中に珠を入れる

マグネット・ボール＜砂鉄球＞を核にして、

「マグネ・アトラクション＜磁引力＞」

そこに小さな惑星が出来る。炎が玉に自らぶつかり潰れていった。
うん、これ必殺技だ

一陣の風が吹く。俺とミナトの間に黒い玉が浮いたままだった。

「参りました」

「よし！」

ミナトが降参をして俺が勝った。

それからミナトが俺にそっけなくしたのは言うまでもない

12月27日 <AM>

俺の能力は<万有引力>。

引力、斥力（反発力）、磁力である。

俺がPSIを使うだけで地球の引力や万有引力が狂う。

俺の能力は大きいスケールで言うと、地球の働きを狂わすのだ。
悪い表現かな？

次は……？

「私よ」

「35号？」

「固有名はアキ」

「おっけー。」

レベル4じゃん。

「大丈夫よ、私はレベル4でも戦闘向きの能力じゃないから
でもハンデはなしよ」

「そうか……」

「<物体移動>」
テレキネシス

地面の石が持ち上げられ俺を襲う

「<反発力>」
レプリシオン

360度に<反発力>を行う
レプリシオン

バシ！ 痛……

「!？」

「フッフ、あなたの考えていることはお見通しよ

あなたの<反発力>は1：1で空き時間が要る。
レプリシオン

今、3秒使ったから3秒の空き時間が存在するわけだ。

その間に石を頬にぶつけただけよ」

「……そうか」

「今の自分を超えなさい

ちなみに二人とも5撃ぶつよ」

「おつけー マグネ・フィルター <大磁場>」

「その能力は1：2で空き時間ね、あなたの能力じゃ15秒が限度
終わったら30秒は何の能力も使えない」

前は4秒とか2秒とかにしておいたんだがな

同時に能力を使ったりしていたんだが。

磁場を利用して砂鉄を鋭利にしてアキに向かわせる

さっ さっ とかわす。

(そうか。俺の攻撃パターンを読んでいるのか)

「そろそろよ」

ふっ と磁場が消え、浮いていた砂鉄が落ちていく

「<物体移動>」

「くっ うっ!」

頑張ってかわすが動く方向まで読まれているんだ、2発も喰らって
しまった

(だったら……)

俺は考える。あいつの処理が間に合わないくらいの力をぶつければ
いいじゃないか

「でも、それはあなたに出来ない」

「うっせー」

そんな力をぶつけたらアキは消し飛ぶだろうな

「さて。」

一陣の風が吹く

大量の浮いている石共をはさんで俺とアキが睨みあつ

こいつは……結構強い相手だ

12月27日 <AM>

実力は均衡していた。

だが常に2手も3手も先を読まれて追い込まれてしまう。

何とか切り抜けても隙を突かれてしまう。

俺は4撃あいつは0撃のダメージだ

「あなたの負けよ」

アキが中傷にもた笑みを浮かべる。こいつも結構腹黒い性格してんな。

「……………」

(俺には負けしか残された道はないのか?)

何か……………いい案は?……………重力、引力、磁力、反発力……………

……………最後の一手だ

「<太陽光引力>」
サン・アトラクション

太陽の光を捻じ曲げる。虫眼鏡のように紫外線をアキに集中させる。

「考えたわね <物体移動>」
テレキネシス

地面を持ち上げて紫外線に対する盾を作った。

「……………」

太陽の光を俺の手に集中させる。

引力の力で手に留まらせる。

「……………」

土が邪魔で<精神読み取り>が一瞬切れていたようだ
サイコメンタリー

「<太陽光 銃>」
サン・ブレット

手をアキに向ける。引力の力を手からアキに一直線に放射集中していた小さな太陽はアキの頬を掠めて飛んでいった
研究所の瓦礫にぶつかる一気に溶けてなくなつた

なんとという熱量

アキの頬も焼け爛れてベリベリと剥がれていた

「……………フフ。覚醒したわね

任務終了よ 降参」

「…………？」

「あなたのセンスと力を引っ張り出すのが私の任務だったから」

「大丈夫かい？アキ。」

「大丈夫です ヘアリングをしてもらえれば幸いです」

「了解だ」

なんだかパンドラの箱を開けてしまった気がする

12月27日 <PM>

「アガサよ。今回の事件、どう思う?」

「レベル5以上の作業だと思います。私の考察はレベル7の出現を考えるのが妥当かと」

「レベル7は私以外存在せぬ。レベル6で最近覚醒した奴等を探し、処分するのだ」

これだけの力は放っておけばレベル7にも覚醒しかけない。私たちの野望の敵となれば大きな損害になるだろう。

見つけ出して仲間にするのだ」

「承知しました」

面倒くさい仕事を頼まれた……

この大男はブルーム・ファンクス。地球上唯一のレベル7 P S I 協会の上層部もそれを認めた超超能力者だ。

どのような力を操るのかは見たことがない。

「して、いつごろに搜索を始めればよろしいでしょうか?」

「31日、大晦日でよからう。見つかるまでは一般人を血祭りにあげる」

「……承知しました」

逆らったら即死。一般人を巻き込むのはあまり好きではないのだが「それでは下がってよいぞ、アガサ」

「はっ!」

これから3日は休養だ

コミゾン君は順調に力をつけてきた。

レベル6を認められるほどに。

多種多様な応用力。諦めない精神力

バイタリテイ

そして、あの力。

このまま行けば、今存在する基本的な100種の能力者の弱点と攻

略法、

そして、強大な力をつけることが出来るだろう。

あの……フランクスの組織の幹部たちには敵うだろう

「博士！ 次は誰が？」

「ウム……一旦ご飯休憩にしようか」

「分かりました」

今アウアキネシス液体の能力者と戦い終えた。

「……一旦ご飯休憩にしようか」

博士の声だ……腹へったあ

俺はおにぎり（QpO）の誰かが作ったおにぎり（を貰いに走った

12月31日 <AM>

【0:00】任務開始

ビルの最上階から飛び降りる

そして、能力を最大限に視界に入る人物に向ける

「がは!?!」

「きゃあ」

一般人が苦しむのを見て心が痛む。

(関係ないのに……)

こんな私を止めて欲しい、助けて、とはもう言い飽きた。

どんなやつが私を助けに来てもらわれて重労働させられて罵声を浴びられ

精神が肉体をやられて死んでしまう。

そんなのをもう見たくなかった。私は自我を出来るだけ心の深くに閉じ込めた

私の能力は2点、座標・座標を設定。から に向かう衝撃を起こす。

PPを込めた分だけ向かう力が大きくなる。

今は心臓のの前に と を作って衝撃、心臓が麻痺して死亡。

着地するとき足裏に、着地点に。着地する寸前に弱めに発動。

軽くピョンつと飛んで自殺は免れる。

「てめー、何してんだ?」

追っ手か……めんどくさいなあ

能力者は常に体からPP放出しているから座標がものすごくぶれる。基本、私がトドメをさす。

私は裏手で小刀を手にとってその男と対峙した。

「コミゾン君、おきて!」

「んー？ 博士？ どうしたんです？」

「例のスクランブル交差点でやはり襲撃が起こった。
組織の幹部か、2号だ」

「行きます！」

例の、とかやはり、とは、前々から襲撃が起こるかもしれないと予測していた場所だ

もちろん、<予知>で出していた場所だ。
プレコミュニケーション

「よし、Q p oを適当に2、3人連れて行かせるから先に行っていてくれ」

「了解です」

（弱かったわね）

男はそこまで強くなかった。<精神読み取り>の使い手だったけど

<物体移動>も使えないんじゃない、能力の持ち腐れよ。
テレキネシス

後ろを向くと、どこかで見た顔をした男がいた

「アガサ、帰るつもりはあるか？」

「なぜ私の名前を知っている？」

「ま、いろいろあつてな」

「帰れ、一般人であろう。殺したくない」

私は血まみれの剣を片手に脚に能力を込めた

「一般人じゃねえよ。お前に助けられた

次は俺が助ける番だ」

（そうか）

こいつは24日あたりで出会って巻き込みたくないと助けてしまった奴か

「だったら去れ。それが今お前の出来る一番の行動だ」

「断固拒否する」

俺はお前を守れ、助け出せ、と頼まれてるんでなあ

パパッ っと終わらせたいんだ、帰るぞ」

「そんな気持ちで仕事をするな、死ぬぞ」

「殺せよ。それでお前が博士の下に戻るなら

俺は喜んでこの身を投げ出そう」

「殺す、だが帰らない」

「そーかよ 全く。後悔するぞ」

「どつちの台詞だ」

ポケットに手を入れて気丈に話す奴がにくい。

あいつは6日前までは力を持っていなかった

いける。レベル5くらいでも使いこなせないはずだ。

「さてと、援軍来てないけど引きずってでも連れて帰るぞ」

「やってみろ」

私は脚に能力を込めた。

「かてねーぞ」

12月31日 <AM>

「かてねーぞ」

自信はある。アイツの能力は衝撃。

一度見た。Q p oに同じ能力者は居ないが博士に弱点を教えてもらった。

弱点とは能力者に向けると座標がぶれるのだ。

「勝てるわよ」

直接俺を狙って衝撃を打つてくることはないだろう。

俺の能力は 座標と 座標を設定。

引力なら へ

反発力なら (が のある方向と反対に動く)

の設定も出来るが上位的な能力に使う。

ゴオワ！つと地面が上に引き出される。

俺はそれに逆らわず、上空に飛ばされる

「<空気弓>」
エアール・アーチェリー

俺の腹にとんでもない衝撃が入った。

「が……はあ」

上げられた上空から3、4mほど飛ばされ、俺は息をついた

「あなたがどんな能力かは知らないけど

熟練度では私が上。

動くな、オゾン層からあなたの背中を打ち抜くわよ」

蹲って腹を抱えている俺は上から狙われているようだ。

エアール・アーチェリー
<空気弓>は敵の前の空気に

それに向かって打ち出したい方向と反対に。

衝撃で、空気が押し出され、衝撃が入る。

かわせたものは居ない。

完全に狙っていたなら確実にそこに当たる。

今は奴の背中に、オゾン層と同じほどの高さに を置いている。
「てめえ、強いなあ……」

でもなあ……負けたくないんだよ……」

アイツの手には黒かむらさきか判別しにくい三角形が生み出されて
いた。

バースム・トライアングル
「<真空三角形>……!!」

「……ッ!く!」

エアリー・アーチェリー
特大の<空気弓>を発射する

三角形に空気があたり、無に帰している。

「これは特別製でなあ……、でぐちゃぐちゃに引力働かせ
てんだ。

空気が遠心力で出て行く。おかげで真空となり、あつたものは
真空中で捻じ曲げられ、引力で捻じ曲げられ、遠心力で捻じ曲げられ、
ものは混ざり、空気に四散するんだ。」

「……ッ! <万有引力>!
「ヒンゴ正解」

「うあああああ」

エアリー・アーチェリー
彼の周りに10台の<空気弓>を設置。

一気に放射。

バースム・スクエア
「<真空四角形>」

彼の周りに先ほどの三角形と同じ色をしたものが現れる。

「攻撃は通じないぞ……」

……冷静になれ。今回の任務はレベル6の発掘。

ならばこいつがそうであろう。任務開始

「白旗を揚げる!」

「そうか。んじゃあ帰ろう。」

「まで、私たちの組織に入らないか?」

「断固拒否する。さ!帰るぞ」

腕を掴んで引つ張る。

「何をしている。」

「!？」

そこに組織の幹部、エネアリー魔幻視が立っていた

「てめえが組織のリーダーか？」

「答える義理はない」

12月31日 <AM>

「どこに連れて行くんだよ！」

さっき現れた男がアガサに触れたとたんに10mほど先のほうに飛ばされた

思わず宙に浮いている腕をどけた。

でも違和感が残る。

向こうに連れて行かれて一瞬、感触が残っていた。

手を離していなければずっと触っていたかもしれない。

「私の名前はエネアリー、

君を撲滅しに来た。」

すると腕（手首から先）が飛んできた。

「うわあ!?!」

バースム・トライアングル

<真空三角形>で腕を切る。

なんともない、これは………幻術

「<幻術>！」

「違うんだな」

すると切れなかったはずの腕が俺の頬を殴りつけた。

「ぐっ」

リアル・ハシナトリ

「<現幻>だ」

聞いたことねえな

「しらねえよ！」

浮いている実際に殴った腕を切った。次も切れなかった。

「無理だ」

「ちっ」

睨みつけた。

「大丈夫!? コミゾン！」

アガサと同じ顔の少女が現れた。

見た目じゃ見分けがつかない

「アキだ」

「ナギサ」

なんとなく性格同じだな。よく話す奴を出してくれたんだな、博士

「その人は？アガサと誰？」

「エネアリーさんだつてよ」

「……」

もしかしたら……アキが居ればこの能力、攻略出来るかもしんねえ

「アキ、ちよつといいかな」

「二人とも、何言ってるの？」

「ん？」

「ここには誰も居ないじゃない」

「何言ってるんだ？アキ」

「能力解いたら人は見えるけど能力中は誰も居ない。」

何も発していない」

「……」

「……」

「よく見抜いた

だが、実在するものと実在しないものの区別はその女以外分からな

いだろうか？」

「……」

アキにとって見えないといった男が声を発している。

そういうことだ？

「今は顔だけ存在してる！」

「は！？」

「消えた……」

あの幻術の中に実在させるものを選ぶのか？

簡単にまとめるとあれは分身で

腕だけ存在させることも顔だけ存在させることも出来る……と

アキにしか分からない区別だ。

どうする……やばい状況かも

12月31日 <AM> (後書き)

加筆しました

12月31日 <AM>

「本体はどこだ!? アキ、探してくれ」

「もうやってるわよ、ここに居る私たち以外には全然人居ないから分かると思うんだけど……」

「分かるかな?」

「こんの男うつせえな」

「フン!」

腕が5体から2個ずつ10個出された。

「ヤバイ!」

「く!バースム・スクエア<真空四角形>!」

3人を覆う大きな立方体を作りだした。

「無駄だ」

腕が中に入ってきた。PP因子のあるものは入れないんじゃないのか?

俺の固定観念か……

やはり実体のない幻術は消せないみたいだ

はっ つと我に帰るとこれはヤバイと思った。

殴られてこの壁にぶつかると死ぬじゃん!

腕が俺に触れる瞬間ナギサが俺に触れた。

次の瞬間、バースム・スクエア<真空四角形>の中から外に出ている

グラヴィテーター<万有引力者>にサイコメントラ<精神読み取り者>にテレポーター<瞬間移動者>か

レアな能力者が勢ぞろいだ。流石Qp oと実験体」

「俺が実験体だと?」

「そうだろ?いろいろな機械を使わされたんじゃないのか?」

「くう」

「結局は最終兵器作成の踏み台さ。サブプレーヤー」

俺みたいな完全希少種みたいなのは作成されてないだろう」

完全希少種、突然変異でその固体にしか宿らない特殊能力

恐らく<幻術>の変形体か……

「結局は貴様の能力は与えられた能力なんだよ！
一生その力に頼るんだな」

この感覚は何だ……別にこいつの口調がいやなわけじゃない
言われた言葉が気になったわけでもない……

「……博士を馬鹿にするなあ！」

3人が一度に言葉を発した。同じ言葉だった。

このフツフツと沸き立つ感覚は……この怒りだけではない、
でもこの戦いのうちは忘れなければ。

「私、違う力が使えるかも……？」

「アキ？」

「なんだか……違う自分が居るみたい……」

「あなたもね……」

「ナギサ？」

この感覚は……

「貴様等、何を言っている」

「うあああ」

アキは手からなにやら緑の光線が出てきた

「無駄だ……」

「フフ……思い出したわ……Q p o 覚醒の条件」

「……！」

幻術が動こうとしたが遅かった、俺はこれはチャンスなのか？

とアキに目配りして、アキはうなずいた。

ナギサが俺に手も触れてないのに転送した

光線が当たると幻術は（俺にはわからなかったが）本物となった。

俺は風圧で作った刃を突き立てた。

ザックリ刺さった。本物のようだ。

心臓を貫いた。貫通して後ろから白く不透明な刃が見える。

俺がPPを消すと、その刃はなくなった。俺は吐いた。

「これが現実よ。」

いつの間にか後ろにアキが居た。

恐らくナギサに転送されたのだろう

アガサはこいつの能力で幻術 実態で本拠地にでも送られたの
だろう。

俺は急に頭が痛くなった。とてつもなく

「ぐあああああああああああ」

俺は気絶してしまった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8596z/>

去った日常

2012年1月6日22時52分発行